

# 「ぼくがみてきた戦争と平和」

フォト・ジャーナリスト長倉洋海さんの講演

## 第23回AKIHIKOの会開催



さる二〇〇八年三月二〇日(祝)第23回AKIHIKOの会が東京・神楽坂日本出版クラブ会館において開催されました。

今回のゲスト講師はフォト・ジャーナリストの長倉洋海さん。長倉さんは北海道釧路市生まれ。京都での大学生時代は探検部に所属し、手製筏による日本海漂流やアフガン遊牧民接触などの探検行をする。一九八〇年、勤めていた通信社を辞め、フリーの写真家となり、以降世界の紛争地域、とくに私たちにとっては遠く視界に入らなかつた大地上のアフガニスタンを中心に取材。

そのカメラアイは戦争の表層よりも、そこに生きる人間そのものを捉えようとするもので、アフガニスタン抵抗運動の指導者マスードや中米エルサルバドルの難民キャンプの少女ヘスースを長い

スパンで撮影し続けた写真集『マスード 愛しの大地アフガン』や『ヘスースとフランシスコ エルサルバドル内戦を生き抜いて』などは「右目でファインダーを、左目でそこに映らないものをみた」結晶として届けられたものでした。第一二回土門拳賞、日本写真協会年度賞、講談社出版文化賞などを受賞。

長倉洋海さんは二年前、静岡県立大学で開かれた公開シンポジウム「岡村昭彦の全体像に迫る」で「岡村さんには生前一度しか会ったことはありませんが、超えなければいけない大きな存在でした」と語っていて、ぜひともAKIHIKOの会でお話をお聞きしたいと願っていました。今回の講演は念願叶ったものです。講演の詳しい内容については以下の抄録をご覧ください。

昨年暮れから今年にかけていくつかの動きがありました。一月二四日、一月二日函館市地域交流まちづくりセンターで写真展「岡村昭彦の軌跡 十字街からベトナムへ。ホスピスへ。」が開かれ、五月二三日静岡県立大学付属図書館で、岡村昭彦が寄贈した一万六千冊を一カ所に集めた「岡村文庫」オープニング記念式典・講演会、国際報道写真家岡村昭彦が書物に託した未来」が開催されました。また六月二八日には慶応大学経済学部春学期集中講座「いのち」の歴史学」で、世話人米沢慧さんが岡村昭彦の写真を読む視点から「いのち」について講義をしました。

AKIHIKOの会当日は、これらの報告と案内があり、第二部懇親会は長倉氏らを囲んでいつもの通り楽しい会となりました。当日の参加者は七一名。

# 函館写真展「岡村昭彦の軌跡」報告

北海道新聞写真部

植村 佳弘



皆さんはじめまして、私は植村佳弘と申します。今日は札幌から来ました。簡単に自己紹介をさせていただきます。本職は札幌にある北海道新聞の写真部のデスクという仕事をしています。

今回写真展を企画した、その関係でいいますとプライベートでNPO 函館写真図書館フォトアーカイブス」という団体副理事長をやっております。これは写真図書館、写真集を中心にした図書館で、種々の写真集を収集してアーカイブ化する作業を細々と六年間やっていたのですが、実は昨年九月に場所とお金の問題で一旦閉館しており、いま再起しようというところにいるところです。そついつ活動をしております。

写真展はそのNPO法人「函館写真図書館」フォトアーカイブスで主催いたしました。

岡村さんの写真展の概要ですけど、昨年のクリスマススイフ、一二月二四日から一月二二日まで函館市内で開催しました。中心部からちょっと外れた函館山周辺の旧市街で、実際にカウントしたのは一五〇〇人ですが、一〇〇〇人弱は入っていたと思います。私たちの予想以上に来ていただいて、かつ熱心に見ていただいたと、そんな気がしております。

岡村さんが函館市内の十字街にある栄文堂という本屋さんの娘さんと結婚して、そこで新婚生活をスタートさせました。そこで写真展のタイトルも「十字街からベトナムへ、ホスピスへ」それは栄文堂さんが、今も長女の佐藤純子さんによって切り盛りされているからです。会場はそこから歩いて三分の「地域交流まちづくりセンター」でした。

トラピスト修道院とその函館時代に岡村さんが自分を取り戻し、そして世界に出て行くような蓄積をした場所が函館ではないかと、そんなふうに勝手に思っています。そのタイトルにしました。

ここでもう一つ申し上げたいのは、実は岡村さんが撮影した三時間ほどの8ミリフィルムが残されていたということです。舞阪の家にあったものを佐藤純子さんが保管していたものです。8ミリフィルムなので映写機自体がありませんので見られなかったのですが、二年前、写真図書館でDVDに直す作業をしまして、一五分に編集したものをこの度写真展の会場で上映して見てもらいました。本日もあとで懇親会の時上映されると聞いております。

内容としては特別なものではありませんが、生まれたばかりの長女の純子さんと次女聡さんと、要するにお母さんが子供と公園で遊んでいる内容であったり、函館から列車に乗って札幌を経て稚内に行って、稚内から利尻島に行って、利尻島から小樽に戻るといっ、そついつ類の記録であるといったものです。

今回のDVDには入っていませんが、結構あったのは全国の修道院を廻ったときのフィルムですね。

このことについては北海道新聞の石川崇子記者が岡村春彦さんご夫妻とトラピスト修道院へ一緒にしたときの話を新聞のコラムに書いています。

当時の修道院長でトマ高橋源一郎神父という方

がおられました。その方はすごく写真が好きで岡村さんを修道院行脚といつか、ご自分が修道院を訪問するとき記録係みたいなかたちで岡村さんを連れていったらしいのです。

8ミリカメラといつのはその当時高価ですから、院長から借りて、多分そういつかたちで8ミリフィルムを廻していたのではないのでしょうか。そんな話を、岡村さんが修道院に客室係として働いていた当時、図書室を担当していたシメオン高橋正行神父がされていたそうです。

一九九六年に修道院が創立百周年を迎えた時に、私は函館で勤務しており、一年間、修道院に通って取材をさせてもらいました。高橋神父は実は兄弟で神父をされており、今はローマ在住の弟、重幸神父が五月に帰国されるそうなので、お話が聞ければもっと詳しくわかると思いますし、岡村さんが撮った修道院の説明もしていただけだと思います。

今回、岡村さんの写真展をやると言い出したのは私ですが、NPOといつても実質は私の他にあと一人しかいなくて、二人で写真展をやったような感じですね。

私は岡村さんが函館に縁があるといつことは、北海道新聞社函館支社に勤務していたので知っていたのですけど、写真展をやるとなると諸々の作業といつか、いろんなことを学ばなければできないだろうと、そういう意味ではいつかはやりたいなと

先送りにしてきました。

ところが昨年九月ですか、当時の安倍首相が「対策特別措置法」を延長して給油作業を続ける、続けるのに職を賭けると言ったことに、私は非常に憤慨したといつか、切れたんです。

「美しい国」といいながら、自分たちの国が過去にやってきたことを直視も反省もきちんとしないで、アメリカに対して、媚びへつらう態度に私は切れました。

このタイミングといつと言いは悪いんですけど、その段階で岡村さんの写真を、存在を函館の地に放つといつか、放ちたいと思って写真展を開催しました。

やってみて岡村さんがいつも問いかけていた言葉「私たちはどんな時代に生きているのか。あるいは人間は何処から来て何処に行くのか」。その問いかけは、けっして過去のものではないといつことに気づきました。

世界がどんどん混迷化していく、その中で再び、再びといつかそういつ時代だから、いまになっても見続けるといつか、その問いかけが続いているのではないかと思っております。

函館でつくったチラシですが、私もちよつと文章を書いているので、おいて置きますのであとで見ただければと思います。

写真図書館の方はいま閉館していて、再起の道を

現在、模索しているところですが、また開館できたら函館に縁のある国際報道写真家としての岡村昭彦さんの常設展示コーナーをつくりたいなと思っています。

今後何かと岡村さんとの関わりは続くかと思っていますので、今後ともよろしくお願ひしたいと思います。以上です。



# 静岡県立大学岡村昭彦 文書研究会活動報告

「文書研究会」世話人 比留間洋一



皆さんこんにちは、静岡県立大学国際関係学部  
の比留間洋一と申します。今日の一つのメッセー  
ジとしては多くの方々のご協力でのたび静岡県  
立大学附属図書館に入っている岡村文庫がリニ  
ユアルした。そのことをお伝えしたいことです。

どういつ順番でお話したいかといつ、一つは多

くの方々に対してお礼を申し上げたいということ。  
もう一つはリニユアルの内容について。最後に、私  
は国際関係学部でベトナム研究をしているので、そ  
の立場からみて段々とわかってきたことについてお  
話したいと思います。

まず第一番目に「AKIHIKOの会」のみなさん  
にこの度もご協力いただきました。本当にありがとう  
ございました。一六〇〇冊の本がばらばら入  
っていたのを今回、一カ所に集めたのです。その部  
屋の壁にいろいろなパネルを用意したのですが、そ  
のとき著作権といろいろなクリアする問題があり  
まして、そこは当然ご遺族の方々に寛大に認めてい  
ただいて、本当にありがとうございました。

次に、一人ご紹介したいのですが、一人目は先ほ  
ど紹介していただきましたうちの大学の附属図書  
館事務長の増田曜子さん、増田さんには今日わざ  
わざ来ていただきました。

もう一人、図書館スタッフで、非常に精力的にや  
ってくださっているのが中西晴代さんです。中西さ  
んにも静岡から来ていただきました

私は静岡県立大学で三年前の平成一七年に国際  
関係学部の教員を中心に「岡村昭彦文書研究会」  
を立ち上げまして、一人ほととのメンバーの一人な  
のです。ただその「文書研究会」の教員ではなく、実  
質的に図書館の方にもやっていただいたのです。

あとこれも非常に嬉しいことなのですが、県立大

学のOB二人とも卒業したOBですけど、一人は  
望月良憲さん、報道写真家でもいらっしゃいます。  
望月さんにも今回いろいろなこと協力していただ  
きました。それから隣に座っている河田透君はいま  
時事通信社で、今度からカメラマンになるんです  
が、河田君も来てくれます。こういつた多くの  
方々の協力を得て何とか「岡村文庫」はリニユアル  
しました。

次はリニユアルの内容ですが、これは時間がな  
いのでお楽しみとさせていただきます。実はまだ完成し  
ていないのです。パネルも展示していません。一  
度きたらまた来たいと思う、そういつような場  
所にしたいなあと心がけています。お楽しみとい  
うことで。

四月に入ってから、いつ頃かはつきりしないので  
すが、静岡県立大学、静岡大学ではないので覚えて  
おいてください。静岡県立大学のホームページにア  
クセスしていただければ、いろいろな情報をそこに  
載せるつもりですので参考になさってください。

来年度の計画について話をします。これはいくつ  
かあるのですが、一つは私が授業で、国際関係だけ  
でなく全学の学生、一応総合大学ですので、全学の  
学生を対象とした教養科目の中で、二回ぐらいの  
授業になると思いますが、実際に岡村文庫に連れ  
ていつ、そのことを紹介する授業をやるうと思っ  
ています。

もう一つは、オープニングセレモニーといつのを多分五月、こじんまりとやります。そのあと、おそらく夏か、来年度の末になると思っただけで、公開シンポジウムと合わせてできれば写真展をやりたいと思っています。その公開シンポジウムの場でわれわれメンバー10人ぐらいのこの三年間の研究成果を報告したいなと思います。



5 / 23 岡村文庫「オープニングに合わせて掲げられたパネル (時事通信社提供)

最後に、最近強く思うようになってきたことについてお話しします。それは要するに日本人とベトナム戦争の関わりを伝える記録、それを残す必要があるということです。

そう思うようになったのは、三年ぐらい前から、図書館長もされている研究会のメンバーの小幡壯先生と一緒に海外授業という学生を連れて主に東南アジアを回っているんです。今回三回目ですけど、そのうち二回ベトナムへ行きました。一回目はホーチミンの大学と交流しました。今回はハノイの大学、二つの大学の学生と交流しました。

それをやって感じたことの一つは日本の学生がベトナムに行くこととベトナム戦争に関心がある。自由時間のときにどこに行ったのかと報告書を見ると、ホーチミンだと「戦争証跡博物館」、ハノイだと「革命博物館」に足を運んでいるわけです。

もう一つは、これが私の中では大きいのですが、ベトナム人の若い人、大学生がベトナム戦争についていろんなことを知りたがっている。自分の国の教科書だけでなくいろんなことを知りたいと思っている。今のベトナムの若い世代は戦争を知らない世代です。そういう意味で「岡村昭彦文庫」がもっている資料は価値があるのではないかと思います。

ホーチミン市にある「戦争証跡博物館」にはご存知のように石川文洋さんの写真であったり、枯葉剤を撮っている中村悟郎さんの写真であったり、当

時の日本の反戦運動の資料が展示してあるんです。ただ岡村さんの残した資料は、そういうものは別の角度でおもしろいんじゃないかなあと、これは私の今後の研究次第ではありますけれども。

あと、静岡空港をつくるとか、大交流時代と聞いて学生だけでなく、いろんな方のベトナムとの交流がすごく増えています。そういう中でやはり日本人がベトナム戦争とどう関わったのかは重要課題。

昨年ここに参加させていただいたとき東京都写真美術館学芸員の金子隆一さんがおっしゃったことがすごく印象に残っています。

「日本人にとって実はベトナム戦争というのは非常に大事なのではないか。太平洋戦争の次ぐらいに実は大事なのかもしれない」というような話でした。

そういう意味で、そしてまたいろんな資料が残っている。写真だけでなくいろんな資料も残っている。当時の『EFE』だとか、解放戦線の文化とか、芸術に関する資料とか、単なる写真展示だけとは違う、一味違った観点で、とにかく日本人とベトナム戦争との関わりを伝えるいい材料になるんじゃないかなと、そういう思いがいまだ膨らんでいます。

ともかく去年も申しあげましたけれど、皆様の協力なしでは本当に何もできない。われわれは新参者ですので、なにとぞ今後とも暖かく見守ってください。よろしくお願いたします。

# 事務局便り

1. HPに会報18号をPDFで掲載しました。
2. 岡村昭彦関連出版物。

## 日本の写真家101 飯沢耕太郎 編(新書館)

150年前の幕末に写真術が渡来してから現代まで、日本写真史を見直し、その意味を解きあかしていくような調査や研究は少ない(まえがき)。日本の写真表現の歴史をその時代を映す表現者としての下岡蓮杖、土門拳、木村伊兵衛、荒木経惟、岡村昭彦、長倉洋海、蛭川実花など、101人の写真家の略歴とその代表作で辿る、これまでにない写真ガイドブック！

2008年5月発行 税込価格¥1890



## 『精神の破壊と復興』 栗本 藤基 著(新葉社)

精神科医療の現場で、病棟の改革と患者の自立に取り組んだ著者の手記によるドキュメンタリー。1980年代岡村昭彦とそのグループで取り組んだ長野県安曇野での活動について今回、改めて当時の岡村の話をもとに正確にまとめなおした。そのほか著者自身の生き方に深い影響を与えた先達の思想とその受け止めについて素描し、実践のルーツと精神科医療の今後への展望を明らかにした好著。2008年4月発行 税込価格¥2100

3. その後の「アキヒコ・オカムラ」資料編

2007年

- 12.18 函館新聞 ジャーナリスト 魂の軌跡 24日 から故岡村昭彦さん写真展
- 12.23 北海道新聞 ベトナムなどを撮影 岡村昭彦の力作 100枚 函館のNPOあすから写真展
- 12.25 函館新聞 命懸けた生涯振り返る 戦場の悲惨さ訴える 150点
- 12.26 朝日新聞道南版 ベトナム戦争実態伝える 100点 函館ゆかりのジャーナリスト 岡村昭彦写真展始まる
- 12.28 北海道新聞道南版 岡村昭彦の軌跡(上) カメラを「武器」に戦場へ
- 12.27 北海道新聞道南版 岡村昭彦の軌跡(下) 「死」を見つめ「生」を考える

2008年

- 1.12 北海道新聞道南版 「やまがら日誌」カメラマン 岡村昭彦の原点
- 4.15 新葉社 『精神の破壊と復興』 栗本藤基編
- 5. 新書館 『日本の写真家101』 飯沢耕太郎編
- 5.15 静岡新聞朝刊総合版 国際報道写真家岡村さんの蔵書紹介 23日「文庫」オープン式典
- 5.24 静岡新聞朝刊総合版 関係者招き完成式典 蔵書1万6000冊集約
- 5.24 朝日新聞朝刊静岡版 「岡村文庫」オープン / 県立大
- 5.27 静岡新聞朝刊(一面) 大自在

4. 恒例「夏季セミナー」案内

AKIHIKOの会世話人米沢慧氏による恒例夏合宿セミナー「リゾートライアングルの会」を実施します。八月(三日土)から(五日月)の2泊3日。

テーマ「ナノの林とアキヒコ」の気脈。

会場は長野県小布施町「オープンハウスしなのぐら」 TEL&FAX (247) 47509

e-mail [cbx71310@pop16.odn.ne.jp](mailto:cbx71310@pop16.odn.ne.jp)

参加費：二泊三日25000円(食事 懇親会代講師料等含む、1泊参加も可)どなたでも参加できます。希望者は八月五日まで米沢慧氏へ。

T165 0033 東京都中野区鷺宮5 6 5 米沢慧

TEL&FAX 03 (6970) 5507

e-mail [aki-1703yonez@nifty.com](mailto:aki-1703yonez@nifty.com)

5. 通信費送付のお願い

今後とも会報や案内等を送付希望する方で、この一、二年通信費(1000円)を振り込んでない方は、左記郵便口座に通信費を振り込んで下さい。

口座番号 「00170 6 615123」

加入者名 「岡村昭彦の会」

『岡村昭彦の会』会報第十八号(2008.7.7)

発行 東京都江戸川区西小岩五 十一 二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03 3657 8380

\* ホームページ <http://akihiko.kazekusa.jp/>

\* メールアドレス [akihiko-no-kai@kazekusa.jp](mailto:akihiko-no-kai@kazekusa.jp)